

2008年6月21日 海外学術調査総括班フォーラム

地域別分科会VI サハラ以南アフリカ

「コンゴ民主共和国でのボノボの調査経験から」

林原生物化学研究所 類人猿研究センター 田代靖子

ボノボは、チンパンジーと同じ **Pan** 属の類人猿で、コンゴ民主共和国（以下、**DRC**）だけに生息する種である。離合集散する父系の群れを作るというチンパンジーとの共通点がありながら、社会性の面では様々な違いが見られる。例えば、母親と息子の親密な関係が長期にわたって続くこと、多様な性器接触行動が見られること、群れ間の関係が比較的緩やかであることなどである。発表者は、このようなボノボの社会性に焦点をあてた研究をおこなってきた。

しかし、ボノボの調査は、**DRC** の政治動向に大きく影響されてきた。1973年の広域調査によって調査地として見いだされ、長期調査がおこなわれてきた赤道州ワンバ村では、1991年の首都キンシャサ市内の暴動によって調査が中断され、1994年に再開したものの、1996年には再び内戦が勃発し調査の中断を余儀なくされた。この内戦は、周辺国の介入によって長期化し、和平合意が成立したあとも、首都での銃撃戦の勃発など不安定な政治状況が続いている。

このような状況の中、ワンバ村での調査は2003年に再開された。調査対象群の存在を確認したものの、ワンバ森林全体のボノボの個体数は減少しているようである。これは、戦争中の密猟が影響しているのではないかと考えられる。

村人の生活も、戦争によって影響を受けている。ワンバ村では戦闘がなかったが、兵士が駐留し、村人からの略奪や密猟を繰り返したという。戦後、村人たちは、現金収入を得るために畑の規模を拡大し、一次林が伐採されている。また、町と村の間の人の行き来が増えたために、ボノボを食べないというタブーを持っていたワンバ村の人たちの中に、ボノボを食べる習慣が入ってきている可能性がある。鉄砲を使った密猟もおこなわれているようである。

村人の研究者に対する態度にも変化が見られる。生活支援への要求がより強いものになり、研究だけをしているわけにはいかなくなっている。そこで、診療所の建設、奨学金制度の開始、空港・道路整備への支援など、様々な活動をおこなっている。これらを通じて、研究活動への地元の協力を取り付けたいと考えている。

今後、アフリカで研究をおこなううえでは、注意すべき点がある。ひとつは政情不安である。**DRC**に限らず、アフリカには政情不安の国が多い。十分な情報収集と、万一の場合の対処法を考える必要がある。二つめとして、病気の問題がある。多くの感染症が報告されているうえ、現地でちゃんとした医者にかかるのは難しい。事前の準備ができる病気に対しては薬の用意や予防接種をおこない、万一の場合の対処法を考えておくべきである。その他に、利用する会社を選ぶこと、(**DRC**の場合には) 役人からの理不尽な要求に対処すること、村人との良好な関係を根気よく築くことなど、多くの努力が必要である。